



文字

文字は意味を表しますが、一方では長い歴史を経た模様でもあり、その背後には生き活きとしたイメージが広がっています。書を得意とした芹沢は、漢字や平仮名など、文字を主題とした作品を次々と制作し、文字の魅力を日本の暮らしに浸透させました。



「染分いろは文二曲屏風」(1973) 柏市蔵



「人の字」(1964) 柏市蔵



「妙の字のれん」(1964) 柏市蔵

板絵「妙好人因幡の源左」(1979)より「ようこそようこそ」



日本の収集品

芹沢は、様々な日本の工芸品を集めました。染織をはじめ、絵画、木工、陶磁器、漆器、玩具など、実に多彩なジャンルに及んでいます。収集品を常に周辺に置いて楽しんでいましたが、一方では作品のヒントやモチーフにもなりました。晩年、「やっぱり私は、古い日本のものが好きだし、そういうものから教わっておりますから、だからそれが仕事に現れて」と語っています。



「波に千鳥文絞り染め着物」



奈良絵本「わださかもり」



「獅子頭」(東北地方)



「木の猿蓑」(熊本県五木郡木葉)



「埴焼甕」(宮城県仙台市)



「花巻土人形 猫」(岩手県花巻市)



「手毬」

- ワークショップなどのイベントを開催する予定です。詳しくはホームページやTwitterをご覧ください、お電話にてお問い合わせください。
- 新型コロナウイルス感染防止対策へのご協力をお願いします。

【開館時間】9:00～16:30

【休館日】毎週月曜日、11/4、11/24

【観覧料】一般420円/高校生・大学生260円/小学生・中学生100円/未就学児無料

(団体割引は30名以上でご利用いただけます)

※静岡市内在住の70歳以上の方・小中学生(通学含む)無料

※障がい者手帳等の提示により本人及び同伴者1名無料

【交通】<バス>静岡駅南口22番バスのりばから「登呂遺跡」行き乗車、約12分終点下車 <タクシー>静岡駅南口から登呂公園へ約10分 <東名高速>静岡I.C.より約10分、日本平久能山スマートI.C.より約5分 <駐車場>登呂公園南側に有料駐車場があります(普通車400円/1日)



「型染には過剰な技術がない。色は単純に煮つめられている。質は見せかけがなく堅実で、模様は絵画から離れて、型紙の必然から生れた模様になり切っている。このように型染には、手仕事の根元的なものから発する美しさがある。」

「型染の工房から」(「婦人画報」1957年)



蒲田の自宅にて(1976)撮影:牧直視

静岡市駿河区登呂五丁目10-5(登呂公園内)
TEL▶054-282-5522 公式HP▶www.seribi.jp
公式Twitter▶@seribi_shizuoka (フォローはこちら)



静岡市立 芹沢銆介美術館



『新版 絵本どんきほうて』(1976)より「作男さんちよ從へ廻国の門出」

静岡市立芹沢銆介美術館 開館40周年記念展 ～秋編～

芹沢銆介の日本

2021.10.9(土) ⇒ 12.12(日)

【出品協力】柏市、東北福祉大学芹沢銆介美術工芸館、日本民藝館

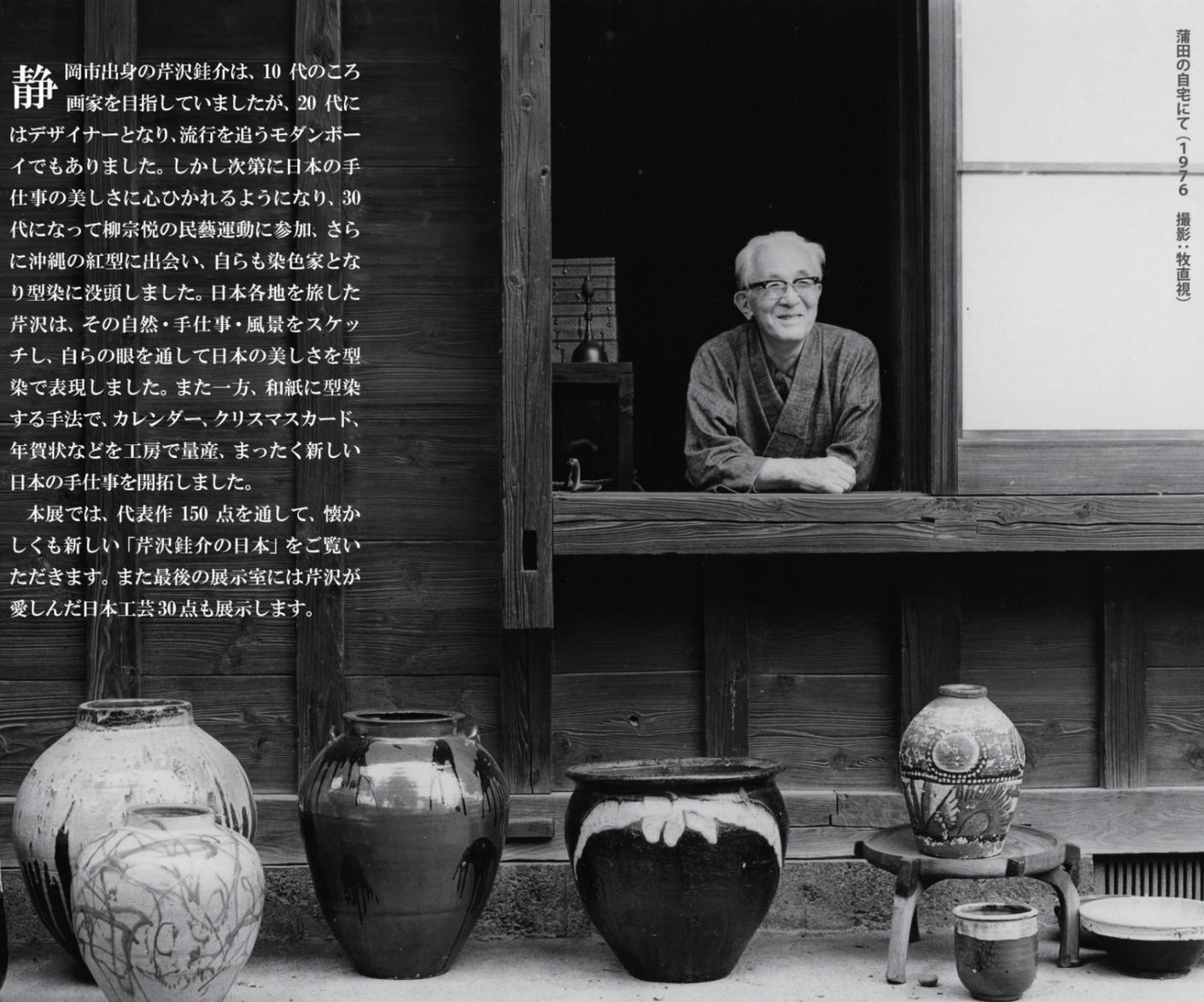
静岡市立 芹沢銆介美術館

静岡市駿河区登呂五丁目10-5(登呂公園内) TEL▶054-282-5522
HP▶www.seribi.jp Twitter▶@seribi_shizuoka (フォローはこちら)

静 岡市出身の芹沢銈介は、10代はデザイナーを目指していましたが、20代にはデザイナーとなり、流行を追うモダンボーイでもありました。しかし次第に日本の手仕事の美しさに心ひかれるようになり、30代になって柳宗悦の民藝運動に参加、さらに沖縄の紅型に出会い、自らも染色家となり型染に没頭しました。日本各地を旅した芹沢は、その自然・手仕事・風景をスケッチし、自らの眼を通して日本の美しさを型染で表現しました。また一方、和紙に型染する手法で、カレンダー、クリスマスカード、年賀状などを工房で量産、まったく新しい日本の手仕事を開拓しました。

本展では、代表作 150 点を通して、懐かしくも新しい「芹沢銈介の日本」をご覧ください。また最後の展示室には芹沢が愛した日本工芸 30 点も展示します。

美しい日本を見つめ続けた、芹沢銈介 八十八年の生涯。



蒲田の自宅にて(1976 撮影・牧直視)

1895-1944

明治 28 年 - 昭和 10 年代

静岡市に生まれた芹沢銈介は、幼い頃から絵を得意としていました。東京高等工業学校工業図案科に進み、20代頃はデザイナーとして幅広い仕事を手がけました。30代に入って生涯の師となる柳宗悦に出会い、また沖縄の紅型の美しさに衝撃を受けたことから、染色家としての道を歩み始めました。1944年、一家で東京へ移住しました。

1945-1964

昭和 20-30 年代

1945年には空襲により家屋、工房、家財を焼失、寄寓生活を続けながら型染カレンダーなどの制作を始め、やがて染紙製品は海外へも輸出されました。1956年、「型絵染」で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。鎌倉市の津で独居生活を始め、創作活動に熱が入り、数々の代表作が生まれました。新聞連載小説の挿絵、建築デザインなど新しい仕事にも挑戦しました。

1965-1984

昭和 40 年代 - 昭和 59 年

1976年、フランス政府からの招聘によるパリの個展「Serizawa」展(国立グラン・パレ)が開催され、高い評価を受けました。同年、文化功労者に選ばれました。自身の作品 600 点と収集品 4500 点を郷里の静岡市に寄贈し、1981年に静岡市立芹沢銈介美術館が開館。1983年には「芹沢銈介全集」(全31巻)が完成しました。1984年4月5日、心不全のため惜しまれつつ 88 歳で永眠しました。

1932 1941 1959 1976 1980



日本の四季



芹沢銈介が最も好んだ作品の主題の一つに四季があります。四季それぞれにちなんだ作品はもちろん、4つの季節をとり込んだ作品、「春夏秋冬」の4文字をちりした作品などがあります。四季折々の自然の美しさ、四季に寄り添いながら続いてきた日本の暮らしを、型染で表現しています。



「四季曼荼羅図二曲屏風」(1971) 柏市蔵



「桐・牡丹文帯地」(1971)



「貝文着尺」(1963)



「苗代川春景」(1943頃)



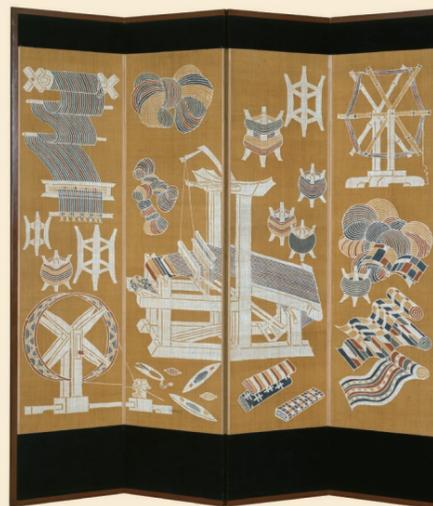
「小模様散らし着物」(1938)



「布文字春夏秋冬二曲屏風」(1965) 柏市蔵

所蔵先の表記のないものはすべて静岡市立芹沢銈介美術館蔵

日本各地の手仕事・風物



「機織図二曲屏風」(1935) 日本民藝館蔵 ※前期展示(10/9-11/14)



「手仕事の日本」小間絵原画(1948) 日本民藝館蔵

日本の手仕事や職人の世界をこよなく愛した芹沢銈介。地方独特の風土から生まれる素材や用途。職人の動きや手さばき。工房のたたずまいや、工夫され使い込まれた道具類。また手仕事の村々の風景に至るまで、丹念に観察してスケッチし、作品のモチーフとしました。そこに、芹沢が愛した日本があります。



「日用品の図」(1965) 柏市蔵



「八雲村道文着物」(1955) 柏市蔵



「箕図二曲屏風」(1957頃)